

## ドイツ語の不完全アスペクトについて

野上 さなみ

### 1. はじめに ードイツ語とアスペクトー

BHAT(1994)は、文法化の度合い、使用の強制の有無、体系化の度合いなどのファクターを基準に、時制・アスペクト・法という3つの動詞範疇のうちどれに突出性があるのかによって、言語を3つのグループ、①Tense-prominent-language: 時制突出型言語、②Mood-prominent-language: 法突出型言語、③Aspect-prominent-language: アスペクト突出型言語に分類している。この分類に従うと、特定の形式によってアスペクトの相違の明示が義務化されていないドイツ語は、『③アスペクト突出型言語には分類されない』ということになる。逆に英語では、不完全アスペクトに含まれるProgressivität(進行中の出来事や反復性)を明示するために「*be+ing*」という形式の使用が義務化されている点においては、アスペクトという範疇がドイツ語に比べれば突出していると言える。本稿ではまず、進行形の使用によって不完全アスペクトの明示が必須となっている英語と、そうではないドイツ語において同一のSituationの描写にどのような差異が見られるのかを、両言語を比較対照することで明確にしたい。さらにその結果に基づき、テキストにおいて、本来アスペクトという文法範疇によって果たされる機能や役割が、ドイツ語においてはどのような方法で再現されるのかをできるかぎり体系的に示すことを最終的な目的とする。

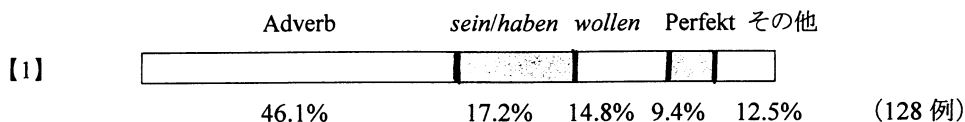
まず、英語を原書とする小説作品において、進行形で表現されている出来事を列挙し、それらの出来事が同一作品のドイツ語訳でどのような形式にのっとって再現されているか、データ収集を行った。そのデータの分類・分析を通して結論を導くことにする。ただし、本論文は単一の著作と一人の翻訳者によるそのドイツ語訳のみを資料としているので、翻訳者個人レベルでの傾向を完全に否定することはできない。よって、ドイツ語のアスペクト研究の出発点となる試論として進めていきたい。欧文の直後に添付した日本語訳は本論執筆者によるものである。データ<sup>1</sup>総数は632例、不完全アスペクトを表層的に明示していると判断できたデータは128例で、これは全体の約20.3%に当たる。データ・ソースとした著作の英語原文およびドイツ語訳は以下のとおりである:

英語版原著: Stef Penney (2006): *The Tenderness of wolves*, Quercus, London

ドイツ語版: Stefanie Retterbuch 訳: *Die Zärtlichkeit der Wölfe*, Goldmann Verlag, München

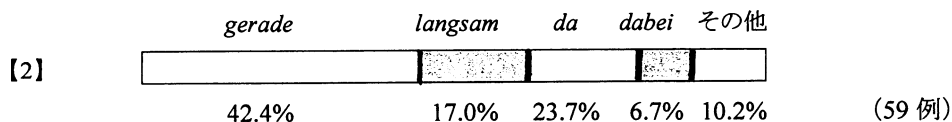
## 2. ドイツ語における Progressivität

Progressivität の積極的な表現として有効だと判断できたデータ 128 例は、表現手段や形式が均一ではなく、いくつかのグループに分類することができる。数が多かったものから順に列挙すると、①副詞の付加(Adverb と表示)、②動詞 *sein/haben* + 副詞句による書き換え(*sein/haben* と表示)、③話法助動詞 *wollen* による書き換え(*wollen* と表示)、④現在完了形による含意(Perfekt と表示)、⑤その他の大きく 5 つになり、データ全体に占める割合をグラフ化したものが【1】である:



### 2.1. Adverb の付加

現在形および過去形といった単純時制形式の動詞に、副詞句を添えるというパターンは、不完了アスペクトを表層的に表現する積極性があると判断できる例の中でも最多数の 59 例を占めている。利用されている副詞は *gerade* (目下のところ・ちょうど)、*langsam* (ゆっくりと・そろそろ)、*da* (そこで・そのとき)、*dabei* (その際に)、その他となっており、それぞれの分布状況をまず【2】に数値で示す:



これらの副詞に関して特徴的なこととして指摘すべきなのは、英語原著では意味の上でこれらに該当する副詞句がまったく利用されていないにもかかわらず、ドイツ語訳ではあえてこれらを新たに添加しているという点である。*gerade* については、ドイツ語において進行性を標示する要素と捉える見解も既に提案されている(Dahl:1985)<sup>2</sup>。しかし興味深いのは、*gerade* がすべてのタイプの動詞と組み合わせることができるわけではないという事実である。たとえば Hentschel&Weydt (1990)は、

- ① \*Ich verhungere gerade. 私は今まさに飢え死にしようとしている。

という文は認められないとして、*gerade* の有効範囲が限定されていることを指摘している。本節では、使用頻度の高かった 3 つの副詞について、不完了アスペクトのひとつとしての進行性を表現するために、これらと組み合わせ可能な動詞に課される意味論的制約や共通点を確認しておく。本論を通して、データ・テキストは原文・ドイツ語訳の順に記述する。

### 2.1.1. gerade

組み合わせられている動詞は、意味の中に特定の到達点を含まない atelic な動詞が 25 例中 21 例を占めている。これら atelic な動詞は VENDLER (1967) の動詞の 4 分類に従うと、activity が 19 例と圧倒的多数を占め、state は 2 例である。telic な動詞 4 例は accomplishment と achievement がそれぞれ 2 例ずつとなっている。動詞の telicity が意味論的制約として機能しているとは言えないものの、atelic な動詞に適用される確立が非常に高い副詞であるといえる。具体例をいくつか挙げる：

- ②1 It will be a great help to me with a monograph I *am writing*.  
Es wäre eine große Hilfe für die Monografie, an der ich *gerade schreibe*.  
(手伝ってくれると) おおいに執筆している論文の助けになるんだけどな。
- ②2 Take her. She's *giving* me the devil of a time.  
Nehmen Sie sie. Sie *macht es mir gerade sehr schwer*.  
(泣き止まない娘を) 連れて行って。事態を悪くしてくれてるから。
- ②3 He inches me toward the end wall, to where the sun *is starting* to burn the horizon.  
Er schiebt mich in Richtung der Kopfseite der Hütte, dorthin,  
wo die Sonne *gerade* den Horizont *in Flammen setzt*.  
彼は私を小屋の端の方へ引っ張って行く、そこはちょうど太陽が  
地平線を染め始めている (の見える) 場所である。

### 2.1.2. langsam

前述の *gerade* とは対照的に全 10 例のうちのすべてが telic な動詞で占められており、atelic な動詞すなわち Vendler の 4 分類による activity や state はまったく含まれていない。動詞の意味に含まれる特定の到達点に向かうプロセスの進行性を叙述する場合に限って有効な副詞であると現段階では判断できる。

- ③ I swear I can hear a sigh, as though he *is running* low on patience.  
Ich schwöre, ich kann ihn seufzen hören, als *reißt ihm langsam* der Geduldsfaden.  
間違いなく、彼がため息をつくのが聞こえる、まるで堪忍袋の緒が  
きれかかっているように。(人質による犯人についてのコメント)

### 2.1.3. da

この副詞と共に共起する 14 の動詞はすべて元来 atelic な動詞か、反復の意味で用いられていると解釈できる動詞であり、*tun* (行う・する) と *sagen* (言う) が頻出している。本来は「そこで」や「そのとき」といった空間的・時間的な共有性を表現する副詞であるが、英語の原文で「be + -ing」の形式

とともに、これに相当する副詞が表記されている例が皆無であったため、ドイツ語では Progressivität の指標として捉えることができると判断した。

- ④1 The going is so difficult that it is some moments  
before they can see who *is calling* them.  
Es ist so schwer voranzukommen, dass es einige Augenblicke dauert,  
ehe sie sehen, wer *da* nach ihnen ruft.  
前に進むのはあまりにも困難なので、誰が彼らと呼んでいるのかわかるまでにはしばらく  
時間がかかるのだ。(雪の中を進む一行が、森で迷った親子の声を聞きつけたときの叙述)
- ④2 I cannot bear the thought I did not realise what *was happening*.  
Ich kann den Gedanken gar nicht ertragen, dass ich nicht gemerkt habe,  
*was da vor sich ging*.  
私は何が起きているのかを理解できなかったという考えに耐えられない。
- ④3 You don't know what you *are saying*.  
Du weißt ja nicht, was du *da sagst*. あなたは自分が何を言ってるのか分かっていない。

## 2.2. sein/haben+副詞句

原著では、VENDLER の 4 分類による activity に属する動詞を、進行形を用いて表現するケースが、ドイツ語では動詞 *sein/haben* を用いて訳されている例が 22 例確認できた。使用頻度が最も高かったのは「動詞 *sein* + *unterwegs*」という表現で、原著では様々な移動の動詞が進行形とともに現れるが、それらがすべてこのひとつのフレーズに集約されてしまっている点が興味深い：

- ⑤1 There was also that time earlier this summer when I *was walking* to  
the MacLaren place and passed his cabin. I heard a violin playing ...  
Und dann war da noch dieser Tag im Sommer, als ich *unterwegs* zum Haus der  
MaLarens *war* und an seiner Hütte vorbeigekommen bin. Ich hörte eine Geige...  
今年の夏、私がマックラレン広場に向けて歩いていたとき、彼の小屋を通りかかったことがあ  
った。ヴァイオリンの音色が聞こえた...
- ⑤2 Say he has *been traveling* on foot for six, seven days.  
And he is tired and hungry. I think we go faster. We catch him.  
Angenommen, er *ist* seit sechs, sieben Tagen zu Fuß *unterwegs*.  
Und er ist müde und hungrig. Dann sind wir auf jeden Fall

### schneller. Wir können ihn einholen.

おそらく、6,7 日間徒歩で旅してきたのだろう。疲れて腹も減っている。我々の方が速いよ。  
追いつけるはずだ。(雪が積もった中、行方の分からない少年の足跡を追う人物の会話)

英語の原著では *travel*(旅する), *walk*(歩く)とそれぞれ意味の異なる「移動の動詞」が用いられており、各動詞は「移動の概念」(MOVE)を共通項目として語彙概念構造の中に含んでいるものの、移動そのものの「種類やあり方」(ART)に応じて区別されるものである。<sup>3</sup> これらの動詞が進行形として現れる際には、当然のことながら二つの概念両方が進行中の出来事の内部に含まれる形を取る。この様子を語彙概念構造で表すと【3】1. のようになり、ART の部分にどのような概念が埋め込まれるかによって、どの動詞なのかが決定されると言える:

#### 【3】 *be walking / traveling / going*

1. 【(MOVE & ART)<sub>Lexikalisch</sub> & ASP(imp)<sub>Morphologisch</sub>】
- 2. 【(MOVE ~~& ART~~)<sub>Lexikalisch</sub> & ASP(imp)<sub>Morphologisch</sub>】

#### 【4】 *sein unterwegs*

【BE<sup>(x)</sup><sub>Lexikalisch</sub>】<sub>Syntaktisch</sub> , x = *unterwegs*

英語の進行形においては、移動概念(MOVE)および種類やあり方(ART)と不完了アスペクト(ASP(imp))が組み合わせられ表現全体の意味ができあがるわけだが、ドイツ語訳では、進行形全体を状態として改めて解釈しているために、【3】2. のように語彙レベルでは移動の種類・あり方(ART)が語彙概念構造から抹消されてしまい、すべて【4】のように *unterwegs*(途中で)という同一の概念を x の位置に埋め込んでしまっている。つまり、不完了アスペクトという要素と移動の種類・あり方(ART)の間で選択を行わざるを得ない表現形式であるといえる。しかしながら、出来事全体を状態として捉えなし、「主語名詞句がある状態にある」という叙述に変換することで、「該当する出来事の内部に視点を据える」という不完了アスペクトが果たすべき本来の目的は、手段を変えながらも直接的に果たしているといえる。

移動を表す動詞以外にも、動詞 *sein* と名詞を組み合わせ、やはり状態叙述の形式で不完了アスペクトを再現するタイプの表現がいくつも確認された。前置詞を利用したものとそうではないものの両方がある。先に紹介した副詞を用いた例では、本来用いられるはずの動詞とは派生関係がないものが用いられている場合がほとんどであったが、前置詞句内部の名詞は、原著で使われる動詞と意味の上で対応するドイツ語の動詞と同一の語源から派生したものであるケースばかりであった。これらの表現の語彙概念構造を表すと【5】のようになり、*Jagd* > *jagen*, *Besuch* > *besuchen*, *Suche* > *suchen*, *Rede* > *reden* という具合に 動詞から派生した名詞形を利用しているために、動詞そのものの意味概念構造から何らかの概念が抹消されるのではなく、動作性(Dynamität)の高い DO から状態を表す BE に転換した形となる:

【5】 英語・進行形 【DO<sup>(x)</sup> & ASP(imp)】<sub>Morphologisch</sub>  
ドイツ語・状態形 【BE<sup>(x)</sup>】<sub>Syntaktisch</sub>

- ⑥1 Jens *was hunting* … and saw you there.  
Jens *war auf der Jagd* … und hat Sie dort gefunden.  
Jens は狩をしていて…そこであなたを見つけたんですよ。
- ⑥2 The boy didn't work for the Company; he *was visiting* the country.  
Der Junge arbeitete nicht für die Company, er *war nur zu Besuch* da.  
その少年は社員ではなくて、そこに遊びにきていただけなんだ。
- ⑥3 But you *are looking* for a criminal, you will not find one.  
Aber wenn Sie *auf der Suche sind* nach einem Verbrecher,  
so werden Sie ihn nicht finden.  
でも、もし犯人を捜しておられるならば、見つかりませんよ。
- ⑥4 Who *were* you *talking* about?  
Von wem *war die Rede*? 誰のことを話していたのかしら？

### 2.3. Modus への変換

話法の助動詞 *wollen* を利用して、「主語名詞句が目下なんらかの行為に従事している最中である」という叙述から、「主語名詞句が特定のことを意図する」という叙述に変換している例を考えてみたい。比較的利用頻度が高かったのは、原著において *ask* , *say* などの発言や意思表示の動詞が進行形で現れる箇所に該当する部分である。話法の助動詞を用いたドイツ語訳では、英語において不完了アスペクトと組み合わせて用いられている動詞を「法」と組み合わせる表現に置き換える、すなわちあるカテゴリーを別のカテゴリーに読み替えて解釈しているということになる。

- ⑦1 I think she *was trying* to impress him.  
Ich glaube, sie *wollte* ihn beeindrucken.  
あの娘は彼の気を引こうとしていたのよ。
- ⑦2 You're *suggesting* it is someone who lives here?  
*Wollen* Sie damit sagen, es war jemand von hier?  
(犯人は) ここの住人の誰かだとおっしゃっているのですね？
- ⑦3 What *are* you *saying*?  
Was *willst* du damit sagen? 一体、何を言っているのかね？

## 2.4. Perfekt による含意

ここでは、不完了アスペクトを伴って表現されている出来事を直接にはなく、現在完了など別のカテゴリーを利用して、出来事の継続を含意するというパターンの例を見てゆく。現在完了という時制は本来、基準時点となる現在以前に出来事 X が発生し、その影響が基準時点まで続いていることを表す。しかし現代ドイツ語における現在完了形は、特に会話において、過去形と同じ用いられ方をしている。次に挙げる例でも現在完了形が使われているが、2 人称に向かって直接語りかけたセリフであることをふまえて、過去形の意味を表す形式として解釈する：

⑧1 Did you hear they **are investigating**? They have brought in Company men.

A whole troop. They **are asking** questions up and down the river.”

Haben Sie schon gehört? Sie **haben** Ermittlungen **eingeleitet**.

Sie haben Männer von der Company zu Hilfe gerufen. Einen ganzen Trupp.

Sie **befragen** die Leute flussauf und flussab.

あの人たち調べ回ってるって聞いた？社員を呼んで、総がかりよ。川上も川下も聞いて回ってるわ。(殺人事件直後に息子が行方不明になった母親に対して)

⑧2 You mean You're **locking** Knox in that room there?

Sie meinen, Sie **haben** Knox in dieses Zimmer **gesperrt**?

この部屋に Knox さんを閉じ込めているってことですか？

最初の例では、原著で現在進行形が用いられており、ひとたび開始された調査 (*investigating*) と聞き込み (*asking*) の両方が現在もなお引き続き行われていることがこの形態から『直接』理解できる。これに対しドイツ語訳では、『“調査 (*Ermittlungen*) を導入する (*einleiten*) こと”が行われた』という過去の事実を明言しているのみである。しかし、この調査が「打ち切られた」あるいは「中止された」という事実はまったく言及されていないので、この調査がなおも続行中であると捉えるのが最も自然な解釈である。つまり、直接言及されていなくても、明確に否定する叙述がないために、調査の続行が含意されるという仕組みになっている。まとめると、英語の進行形は特定の出来事が基準時点で継続していることを直接叙述するのに対して、ドイツ語では同一の Situation を叙述するにあたり、過去にある出来事が発生したことを叙述し、それによって継続するはずの出来事を含意するという間接性の仕組みを利用している。さらに、接頭辞 *be-* を伴った動詞の現在形が続く。接頭辞を伴わない *fragen* に対して動作・行為の徹底性や包括性が強調されるため、しらみつぶしに聞き込みをしている様子がうかがえる。さらにこの接頭辞は反復性を積極的に表現する手段でもあるので、<sup>4</sup> 住人ひとりひとりに聞き込みをする反復的プロセスを表すことができる。

2 番目の例でも、原著は現在進行形を用いて、目下閉めこんでいることを直接叙述しているに対して、ドイツ語訳では現在完了形を用いており、ドイツ語の現在完了形が既に単純過去形の意

味に変遷していることを考慮に入れるならば、ここでは現在以前のいつかの時点で閉じ込めたことのみを直接叙述してあることになる。しかし、その後の展開においては一度閉じ込めた人物を開放したという叙述が現れないために、発話時点までその拘束は継続しているということが含意されるという仕組みになっている。

## 2.5. その他の一例（副詞 *wie* の使用）

副文を導くために原著で用いられているのは *how* などの副詞ではなく接続詞 *that* であるが、該当する箇所のドイツ語訳では、副詞 *wie* を使っている例である。知覚動詞に続く副文の導入に接続詞 *dass* ではなく「どのように/どれほど」という疑問詞としても使われる *wie* を利用できることで、後続する副文を単なる事実ではなく、『様態』としてより明確に示すのに役立つと考えられる。それによって、該当する出来事の内容をより詳しく探りながら叙述しようとする意図、言い換えれば「出来事内部に進入しようとする発話者の好奇心」を示唆することが可能となり、これが「出来事内部に据えた視点」を代行する手段として有効なのではないかと考えることができる：

⑨1 I become aware *that* I *am breathing* thickly through my mouth

as I go through his foodstuffs.

Ich merke, *wie* ich hastig durch den Mund *atme*,

während ich die Lebensmittelvorräte durchsuche.

あの子の貯蔵した食品の間を右往左往している間に、口でせわしく

息をしていることに（口でせわしく息をしている様子に）、私は気付く。

⑨2 The musing about news and rumour have come from somewhere, he realises,  
when he finds *that* he *is listening* to a conversation being carried on behind him.

Seine Grübeleien über die Natur von Neuigkeiten und Gerüchten kam nicht von ungefähr, denkt er, als er sich dabei ertappt, *wie* er ein Gespräch am Tisch hinter ihm *verfolgt*.

自分が後ろのテーブルで行われている会話に耳を澄ませていること（様子）に気付くと、ニュースや噂というものについての思惑には何らかのどこどころがあるのだと、彼は思う。

## 3. アスペクトの役割

データの約 80%は、原著に現れる動詞に意味の上で対応するドイツ語の動詞が用いられ、新たな表現・語の付加や別カテゴリーによる含意など、アスペクトの相違を表層的に叙述しようとしているとは判断できない、いわば特にアスペクチュアルなマーケティングが確認できない例が占めている。アスペクトはそれ自体よりも別のカテゴリー情報を伝達する手段として利用されていると仮定すると、アスペクトそのものが特別に形式化されていなくてもテキストの展開においては問題が生じ



ないことになる。ここではアスペクトやテンスといった複数の文法範疇は、それ以外の上位概念を明確に示す役割をになう下位範疇であると捉えて、その上位概念とアスペクト、Aktionsart の関係について考えおきたい。工藤(1995)は、『出来事間の時間的な相互関係、時間的順序性』のことを指す “タクシス” という範疇を「アスペクトの持つ本質的機能」としており、この見解に従うならば、タクシスに関する機能が果たされている限りにおいては、アスペクト自体が特別な表現を与えられる必要はない、ということができる。

各動詞が備えもつ Aktionsart は動詞の語彙のレベルに与えられている特質なので、アスペクトとは異なり、話者がその時々判断で任意に変更することのできない各動詞固有の意味論的特性である。アスペクトと Aktionsart という二つの概念は、特にドイツ語の意味論研究において長い間混同されていたことからもうかがえるとおり、逆に両者の親和性を無視することはできない。今回の分析においても、英語での『不完了相 vs. 完了相』というアスペクト対立が、ドイツ語訳では『継続相 vs. 完了相』という二つの Aktionsart の対立で置き換えられる形で叙述されているケースが非常に多い。つまり、ある言語では A:B という対立によって表現される概念を、別の言語では a:b という違う種類の対立によって表現するという仕組みである。

具体的に述べれば、英語において不完了アスペクトの動詞表現を、ドイツ語では継続相の Aktionsart を備えた動詞を用いて、あるいは英語の完了アスペクトの動詞表現を、ドイツ語では完了相の Aktionsart を持つ動詞を利用して訳すということは問題なく行われる。しかし、英語での不完了アスペクト表現をドイツ語では完了相の Aktionsart で、あるいは英語での完了アスペクト表現を、ドイツ語で継続相の Aktionsart を持つ動詞を用いて訳すという例は、逆にまれである。⑩の例でも明らかなおとおり、原文には現れないまったく別の動詞(*sich fühlen*: 感じる)を利用してドイツ語訳が構成されていても、進行形で表現されている動詞句に相当するからには、やはり継続相の Aktionsart を備えた言い回しがあてがわれている:

⑩ he was *being drawn* towards Laurent, and no power on earth could have stopped him.

Er *fühlte sich* unwiderstehlich zu Laurent *hingezogen*,

und keine Macht dieser Erde hätte ihn zurückhalten können.

彼は Laurent の方に引き寄せられていて、地上のどんな力もそれを止められないかのようだった。

テキストにおけるアスペクトの本質的役割がタクシスのような「上位概念の伝達」であるとするならば、ドイツ語訳の中であえてアスペクトのマーキングを表層的に行っている部分では、この上位概念の正確な伝達のためには、アスペクトによってもたらされる情報が不可欠である度合いが強い可能性がある。このようにアスペクチュアルな情報が強く要求されるのはどのようなケースなのかということは今後はより詳細に研究してゆきたい。

#### 4. 結論

動詞 *sein* と前置詞および不定詞とを組み合わせさせた構造 (*sein* + *am/beim* Infinitiv) が、ドイツ語では進行形に該当するものとして研究が進んでおり (Baudot:2005, Krause:2002)、DUDEN などの文法書での動詞範疇に関する記述においても、この構造が “Deutsches Progressiv” として紹介される比率が高くなってきている。しかし現在のところ、まだ文法化のプロセスの途中にある形式なので、今回の翻訳分析では積極的な使用が残念ながら 1 例も確認されなかった。今後このような形式の書き言葉への普及が見られるのかどうか、といった点についても着目していくべきであろう。本論でのデータ分析から導き出される結論を、以下の 3 点にまとめる:

1. ドイツ語の Progressivität の積極的表現手段は複数の方法に分布している。
2. 表現手段の分布は決して任意ではなく、叙述される出来事の意味論的特質や内容に応じて選択される傾向がある。
3. 英語ではアスペクトで表現する内容を、ドイツ語では別範疇に解釈変換する例が多い。

【注】 1:英語データのほとんどにおいて、従属接続詞 *that* 等の直前のカンマが欠落しているが、これは原著の記述に従ったものである。 2:しかし、Dahl が進行性の指標として挙げているのは副詞 *gerade* と Gerundium とを組み合わせさせた形式であり、*gerade* 単独ではない。 3:TALMY (1985) 参照。 4:野上(2005)参照。

### Bibliographie

- Baudot, D. (2005): Der Infinitiv als Marker der Progressivität im Deutschen: die so genannten Verlaufsformen. In: Marillier, J-F.& Rozier, C. (eds): *Der Infinitiv im Deutschen*. Stauffenburg, Tübingen
- Bhat, D.N.S. (1999) : *The prominence of tense, aspect and mood*, Amsterdam/Philadelphia
- Dahl, Ö. (1985): *Tense and aspect systems*. Blackwell. Oxford, New York
- Hentschel & Weydt (1990): *Handbuch der deutschen Grammatik*. Walter de Gruyter. Berlin
- Krause, O. (2002): *Progressiv im Deutschen, Eine empirische Untersuchung im Kontrast mit Niederländisch und Englisch*. (Linguistische Arbeiten 462) Niemeyer. Tübingen
- 工藤真由美:(1995): アスペクト・テンス体系とテキスト、現代日本語の時間の表現、ひつじ書房
- 野上さなみ(2005): ドイツ語における自動詞と接頭辞 *be-* の関係について In: ニダバ 34 号, 西日本言語学会, p.67-76
- Talmy, L. (1985): Lexicalization patterns: semantic structure in lexical forms. In: Shopen, T. (ed.): *Language typology and syntactic description. Vol.III. Grammatical categories and the lexicon*. Cambridge. p.57-149
- Vendler, Z. (1967) : Verbs and Times. In: Vendler, Z.(ed.): *Linguistics in Philosophy*. New York.